『海辺のカフカ』論

― 記憶の簒奪と物語の癒し ―

小松原孝文*
taka_bara@hotmail.com

Contents

1. はじめに
2. カフカ少年のトラウマ / 岡持節子と佐伯さんのトラウマ
3. 意志的記憶 / 無意志的記憶
4. 図書館 / 森の中
5. 完全な自己 / 内なる他者
6. 生き残るもの / 殺されるもの
7. 強きもの / 弱きもの
8. 物語と責任
9. おわりに

Abstract

本稿では、「トラウマ・記憶・物語」などを手がかりとして、村上春樹の『海辺のカフカ』について分析する。主人公のカフカ少年が、自分のトラウマを克服するために、いかに記憶の中から他者的なものを殺していくか、また記憶を扱えないものを弱き他者として排除することで、いかに記憶を管理できる強い主体として自己を確立するか、詳しく論証していきたい。確かに、こうした記憶を自己の支配下におく試みは、心的外傷から回復するための一つの方法であるだろう。しかし、他者を排除して自分の都合の良いように、記憶を物語ることは、倫理や責任の問題をともなうはずである。だが、そうした問題は曖昧にされたまま、責任は殺される他者へと転嫁されていく。こうした記憶の簒奪と責任回避が、もし「癒し」の物語として受け取られているならば、それは恐ろしい自己満足として大きな問題をはらんでいると、私は考える。

Key Words ：トラウマ、記憶、物語、自己、他者、責任、歴史

＊ 東京大学大学院 総合文化研究科 博士課程

1. はじめに

本稿では、村上春樹の『海辺のカフカ』について、「トラウマ・記憶・物語」などをキーワードとして考えていきたい。これらはいずれも精神分析と深く関わる問題であるが、『海辺のカフカ』を貫くテーマでもある。しかし、それだけではない。近年の村上春樹は、精神分析的なものを自覚的に小説に取りこんでおり、そのことを見逃すわけにはいかない。

村上は、心理学者である河合隼雄との対談で、『ねじまき鳥クロニクル』(1992～1995)あたりから、社会への「コミットメント」を考えるようになったと述べている。1) この小説の第三部が刊行された95年は、日本では阪神・淡路大震災や地下鉄サリン事件が起きた年であり、社会の中でトラウマの問題が広く語られるようになった年である。実際村上はその後、震災をモチーフとした短編小説集『神の子はみな踊る』や、一連のオウム事件を取材したノンフィクション『アンダーグラウンド』・『約束された場所で』など、トラウマが問題となる事件についての作品を次々と発表していく。

精神科医の斎藤環は、90年代の村上春樹の小説には「トラウマと解離」がくりかえし描かれていると指摘する。「解離dissociation」とは、「トラウマやストレスなどから心を保護するためのメカニズム」で「人間の心における時間的・空間的な連続性が失われること」である。解離の今日の正式な診断名は「解離性同一性障害(DID)」であるが、これはいわゆる「多重人格」と呼ばれてきたものである。2)

この解離の手法は、『海辺のカフカ』でも積極的に用いられているといえる。「僕」(=田村カフカ)には、その別人格ともいえる「ナカタさん」がおり、両者のパラレル・ワールドによって物語は進んでいく。両者が同じ人物であることは、ナカタさんが「ジョニー・ウォーカー」(=カフカ少年の父)を殺すと、「僕」にはその返り血がついていることからも明らかだろう。確かに二人は別の時間と空間を生きている。しかし、「時間的・空間的な連続性が失われる」ことが、そもそ

1) 河合隼雄・村上春樹(1999)『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』、新潮文庫、pp.83～84
2) 斎藤環(2004)『解離のポップ・スキル』、勁草書房、pp.109～112

も解離の症状であった。

それだけではない。父が殺害される事件の起きた間、カフカ少年には記憶がない。これは典型的な「解離性健忘」(いわゆる記憶喪失)である。つまり、カフカ少年が別の人格であるナカタさんであった間、カフカ少年の記憶は失われてしまうのである。

解離を引き起こす要因として、とりわけ幼児期の虐待があるとされている。カフカ少年も、猫の虐殺から虐待を連想させる暴力的な父の存在や、4歳のときに血のつながらない姉を連れて母親が出ていったことがトラウマとなっている。また、カフカ少年の分身であるナカタさんも、両親から虐待を受けていたことが、岡持の証言などから明らかになっている。

こうしたトラウマから解離の症状が起こり、非連続になってしまった自己を統一させるのが、この物語の主題であるといえるだろう。そのためには自分の抱えるトラウマに立ち向かうことが必要である。それはまさに、精神分析でいう「治療」にあたる行為である。

このように村上春樹は、精神分析的なものを巧みに小説に取り入れている。それは今日、村上文学が「癒し」という言葉とともに迎えられていることとも無関係ではあるまい。本稿では、先にあげたキーワードをもとに『海辺のカフカ』を詳しく分析するだけでなく、この小説が受容される心理的な状況にも焦点を当てていきたい。3)

2. カフカ少年のトラウマ / 岡持節子と佐伯さんのトラウマ

この物語の中心は、カフカ少年のトラウマである。カフカ少年はトラウマを克服するために、別人格であるナカタさんを通して父を殺す。さらに、母と仮定する佐伯さんとは、半ば夢の状態で性的関係をもち、自分は母から愛されている、自分は母を許すと考えることで、トラウマから立ち直る。これが物語の基底

3) 以下本文で引用するテキストには、新潮文庫版の『海辺のカフカ』(上・下巻)を用いた。引用箇所に記したページは、このテキストのものである。

をなす大雑把な構造であろう。

加藤典洋はカフカ少年がトラウマを回復する要因として、「自分を捨てた母が、かつての自分(と同じ見捨てられた存在)だったという洞察をへて、相手を許す気持になる、という形をとっている」と述べている。[4] しかし、許されたはずの母(=佐伯さん)は、なぜ物語の最後で殺されなければならなかったのだろうか。本稿では、カフカ少年のトラウマの克服は、単なる許しによるものでなく、様々な周りの犠牲の上に成り立っている点に注目したい。

実はトラウマを抱えるのはカフカ少年だけではない。物語には他にもトラウマに苦しむ人物が登場する。例えば、引率した子供たちが突然気絶して記憶を失うという、集団昏睡事件に遭遇した岡持節子である。岡持は事件の調査に訪れた東京の大学の先生に手紙を書く。重要なのはこの手紙が、事件後28年も経ってから書かれたということである。

> 事件発生以来、早いもので既に二十八年の歳月が過ぎ去りました。しかしそれは私の中ではつい昨日起こったことのように、ありありと身近に感じられます。その記憶は未だもっていっときも私から離れることはありません。それは何かの影のようにいつも私のそばにあります。そのために私は数多くの眠れない夜を過ごしましたし、その思いは眠りの中には夢となって現れました。(第12章：p.201)

この手紙によれば、彼女は事件のことが「二十八年の歳月が過ぎ去」っても「ありありと身近に感じられる」どころか、「何かの影のように」とりついて、「夢」の中でさえ苦痛を与えつづけるという。これは事件が岡持にとって深いトラウマとなり、その体験が彼女を苦しめつづけていることにほかならないだろう。

また、20歳で恋人を失った佐伯さんも、トラウマを抱える一人である。佐伯さんは事件のショックで、恋人と過ごした故郷を20年も離れ、町に戻ってきた後も自分の世界から出てくることができないでいる。このことについては、大島さんにより次のように語られる。

---

4) 加藤典洋(2006)「『海辺のカフカ』と「換喩的な世界」」『村上春樹論集②』、若草書房、pp.300～305

> 佐伯さんはある意味では心を病んでいるということだ。もちろん僕だって君だって、心を病んでいる。多かれ少なかれ。それはまちがいない。しかし佐伯さんはそういう一般的な意味を超えて、もっと個別的に病んでいるんだ。魂の機能が普通の人とはちがった動きかたをしていると言っていいかもしれない。(第17章：p.343)

ここからわかる通り、「一般的な意味を超えて、もっと個別的に病んで」おり、「魂の機能が普通の人とはちがった動きかたをしている」佐伯さんも、長年にわたってトラウマを抱きつづけていると考えて間違いないだろう。

カフカ少年が物語の最後で、トラウマから解放され新しい自分として現実世界と関係を結びなおすことができたのに対し、岡持節子と佐伯さんの結末はあまりにも無残である。手紙の中で岡持は、病気で死期が近いことが暗示されるし、一方の佐伯さんも、ナカタさんとの面会によって死へと導かれる。

トラウマを抱えるもの同士、等しく救いがあってもよさそうであるが、救われるのはカフカ少年だけである。なぜ、このような違いが生じたのだろうか。そして、なぜカフカ少年以外は死ななければならなかったのだろうか。また、なぜそうした犠牲の上にしか、カフカ少年はトラウマを回復することができなかったのだろうか。

3. 意志的記憶 / 無意志的記憶

これらの疑問について立ち入る前に、記憶について考えておきたい。記憶は『海辺のカフカ』の重要なテーマであるといってよいが、厳密に考えると次の二つに分けて考えられるだろう。

一つ目は、過去のあることを思い出そうと思って、自らの意志で記憶を取りだしてくることである。これは自分の意志で記憶を想起することであるので、「意志的記憶」と呼んでおこう。二つ目は、過去とつながる何かをきっかけとして、記憶がどこからともなく思い起こされることである。この場合、記憶は自分の意志とは無関係に想起される。これをその性質から、「無意志的記憶」と呼ん

でおこう。

前者は、自分の意志である程度コントロールできるという意味では、「自己」に由来するものである。それに対して、後者は自分の意志とは全く関係なく、向こうからやってくるという意味で、自分とは別の「他者」に由来するものである。

カフカ少年のトラウマについての記憶を考えるとき、それが「意志的記憶」の傾向を強くもっていることは明らかだろう。彼は自分のトラウマを自覚している。父とのうまくいかなかった関係も、4歳で母親に捨てられた体験も、はっきりと思い出すことができる。

しかし、トラウマにとって本当に問題となるのは、「無意志的記憶」によるものである。思い出したくなくて(あるいは思い出すにはあまりにも強烈過ぎて)、無意識の下に抑圧していたものが、何かをきっかけとして突如記憶として呼び覚まされる。これは自分の意志の支配を超えており、自分で何とかできる性質のものではない。だからこそトラウマであり、自分の理解のできない何かに苦しむことになるのである。

岡持節子や佐伯さんのトラウマは、このような「無意志的記憶」に由来するものであろう。例えば、岡持は先生への手紙の最後で次のように述べている。

> そして私の魂の一部はまだあの森の中にとどまっております。何故ならばそれは私の人生のあらゆる営為を超えたものであるからです。(第12章：p.217)

「私の人生のあらゆる営為を超えたもの」というのは、岡持にとって記憶が「意志的」なものではなく、「無意志的」なものであることを示しているだろう。岡持が自分の意志でコントロールできない「無意志的記憶」に、依然として悩まされつづけているのも無理はない。

では岡持が、自分の「営為を超えたもの」に支配されるのはなぜか。それは「私の魂の一部がまだあの森の中にとどまって」いるからである。つまり、「森の中」にいることが、岡持が過去のトラウマから解放されない原因を象徴しているのだ。

ところで、もう一人「森の中にとどまって」いる人物がいた。「入り口の石を探

しあて」、「べつの世界にとどま」った、15歳の佐伯少女である。彼女がいるのも「森の中」であった。そして、その「森の中にとどま」ったことが、20歳で恋人を失った佐伯さんが、いつまでもその傷から立ち直れない要因とされているのである。

つまり、この二人に共通するのは「森の中」である。「入り口」が開かれたあと、カフカ少年はその「森の中」へと入っていくが、彼は現実の世界へと戻ってくる。この両者の違いこそが、カフカ少年がトラウマを回復し、岡持節子と佐伯さんがトラウマを回復できなかった決定的な違いとなっているのである。

4. 図書館 / 森の中

岡持と佐伯さんのとどまる世界は「森の中」である。これについては、インタビューの中で村上春樹自身が言及しているので、少し引用しておきたい。村上は、社会体制の中に「オープン(開放)システムとクローズド(閉鎖)システムの戦い」があるとしたうえで、次のように述べている。

> ただ僕は、やはり、オープンシステムというものを信じているんです。どれだけ矛盾があろうと、どれだけ混乱があろうと、人が自由に入って自由に出て行けるシステムというものを信頼しているし、深みのある物語というのはそこから生まれてくるものだというふうに僕は感じてるんです。5)

> たとえば、彼が最後に佐伯さんーお母さんかどうか分からないけどーの世界に入っていきますね。あれも要するに混沌を排除したところにあるクローズドシステムなんですね。そこに行けば彼は永遠に止まった時間の中で自分が求めるものと一緒に居られるわけです。6)

5) 村上春樹・湯川豊・小山鉄郎(2003)「ロング・インタビュー 村上春樹『海辺のカフカ』を語る」、『文学界』57(4)、p.28
6) 同前、p.29

村上のいう「オープンシステム」とは、自己がその内部だけで完結するのではなく、絶えず外部からの他者の往来を受け入れる開かれたシステムということになろう。そうだとすれば、「佐伯さんの世界」(=森の中)とは、他者が交通することによる「混沌を排除したところにあるクローズドシステム」だということになる。もっと通俗的にいえば、佐伯さんは自分の思い出に閉じこもっている人間だということになるだろう。

しかし、森の中の佐伯少女が語る記憶は、「永遠に止まった時間」の中で思い出に生きるような性質のものではない。例えば、記憶についてカフカ少年に尋ねられた森の中の佐伯少女は、次のように答えている。

> 「私には記憶がない。時間が重要じゃないところでは、記憶もやはり重要ではないの。もちろん昨夜の記憶はあるわよ。私はあなたのためにここに来て、野菜のシチューをつくった。そしてあなたはそれをきれいに食べた。そうよね？その前の日のこともいくらかは覚えている。でもそれより前のことになると、よくわからない。時間は私の中に溶け込んでしまっていて、一つのものと、その隣にあるものとの区別がつかなくなる」(第47章：pp.462～463)

「私には記憶がない」といっても、記憶が全てないわけではない。近い過去のことは、「いくらかは覚えている」のである。むしろ問題とされているのは、「時間は私の中に溶け込んでしまっていて、一つのものと、その隣にあるものとの区別がつかなくなる」というように、出来事を時間的に整理して因果関係をつけることができないということである。だからこそ、過去が遠くなるにつれて記憶が整理できなくなるのだろう。

そうであれば、ここでいう「記憶がない」とは「意志的記憶」がないということである。記憶が自分の中で時間的に位置づけられ、因果関係を結べるものであるというのは、自分の意志である程度コントロール可能な「意志的記憶」であると考えられるからである。

過去を自己管理可能な意志的記憶の集積として考えるならば、確かに佐伯さんは「記憶がない」といえるだろう。だが、記憶には「無意志的記憶」もあるはず

である。佐伯さんのようにトラウマを抱える人間にとって、むしろ問題となるのはこの自ら管理できない方の記憶である。

『海辺のカフカ』には、アイヒマンのホロコーストについて語られるところがあるが、ホロコースト体験者の証言などからも明らかなように、本当にトラウマとなる記憶とは、むしろ時間も因果関係もなく、言葉によって形を与えることを拒むものである。それゆえに被害者は、自己の意志を超えた記憶の想起に苦しみ続けるのである。

森の中の世界はこうした時間や因果を拒む世界であり、それは「無意志的記憶」の世界であるといえるだろう。そうだとすれば、佐伯さんは単に自己の殻に閉じこもって他者を排除しているとはいえないはずである。なぜなら、佐伯さんは自分でコントロールできない他者的なものに、絶えず苦しみながらも直面しているからである。したがって、佐伯さんの世界は、決して「クローズド」された世界ではない。むしろ他者に向かって、常に「オープン」された世界だといえるだろう。

しかし、カフカ少年はそうした森を抜けだして、もとの世界に帰ってくる。そこでまず訪れるのが「図書館」である。図書館に戻ったカフカ少年に、大島さんは次のようにいう。

> 「大事な機会や可能性や、取りかえしのつかない感情。それが生きることのひとつの意味だ。でも僕らの頭の中には、たぶん頭の中だと思うんだけど、そういうものを記憶としてとどめておくための小さな部屋がある。きっとこの図書館の書架みたいな部屋だろう。そして僕らは自分の心の正確なありかを知るために、その部屋のための検索カードをつくりつづけなくてはならない。掃除をしたり、空気を入れ換えたり、花の水をかえたりすることも必要だ。言い換えるなら、君は永遠に君自身の図書館の中で生きていくことになる」(第49章：pp.519-520)

「僕らは自分の心の正確なありかを知るために、その部屋のための検索カードをつくりつづけなくてはならない」とあるように、ここでいう記憶は明らかに自分で管理することのできる「意志的記憶」である。それだけではない。「掃除をし

たり、空気を入れ換えたり、花の水をかえたりすることも必要だ」とあるように、記憶は必要に応じて消去したり、書き換えたりすることも可能なのである。これは完全に自分でコントロール可能な「意志的記憶」の世界であろう。7)

つまり、森の中から図書館へと移動するカフカ少年は、「無意志的記憶」という他者的な世界から、「意志的記憶」という自己的な世界へと戻ってきたのである。注意しなければならないのは、これは村上のいう「オープンシステム / クローズドシステム」とは全く正反対だということである。村上によれば、佐伯さんのいる森の中は「クローズドシステム」であり、そこから「オープンシステム」としての図書館へ戻ることは、自己的なものから他者的なものへ回帰することを意味するはずであった。

しかし、自らの意志で記憶を支配できる図書館という場所は、果たして他者へ開かれたものといえるだろうか。むしろそれは、他者的なものを自己の中へ収奪することではないだろうか。つまり、森の中から図書館へ戻るカフカ少年は、作者の意図とは裏腹に、他者的な世界から自己的な世界へと帰ってきたのである。

5. 完全な自己 / 内なる他者

自己と他者の関係について、もう一つ重要な問題がある。それは「血」にかかわるものである。これは先に引用した村上本人のインタビューで、佐伯さんの話と並列して考えられていることからも、その問題性の関連は明らかである。村上は次のように述べている。

> もうひとつ、彼が受け継いだ血というか暗闇というのも、ある意味では閉じているんです、それは自分で選べないものだから。それをどのように自分の中で相対化して、よりオープンなものにしていくかというのも彼のもうひとつの戦いなんですね。8)

7) 確かに、森の中にも図書館がなかったわけではない。しかし、図書館は遠いところにあり、本も置いていないという。これはもはや図書館としての機能を失っているといえるだろう。佐伯少女は「記憶は私たちとはべつに、図書館が扱うことなの」といっている。

8) 村上春樹・湯川豊・小山鉄郎、前掲書、p.29

だが、「自分で選べないもの」である「血」が、なぜ「閉じている」ものとなるのだろうか。自分で選べないということは、自分の力を超えた他者的なものが自己の中へ入ってくることである。むしろ、そのような他者的なものを受け入れてこそ、はじめて「オープン」なものとなれるはずである。もし、自分で選べるのであれば、他者は自己の作り出した他者イメージの単なる反映ということになり、もはや純粋に他者とは呼べないものとなってしまうだろう。

したがって、ここでも村上のいう「オープンシステム」と「クローズドシステム」は、転倒しているといわざるをえない。このことを小説に即して考えてみよう。そもそもカフカ少年は、冒頭で次のように述べていた。

> そうしようと思えば父親を殺すことはできる。(現在の僕の力をもってすれば決してむずかしいことじゃない)母親を記憶から抹殺することもできる。でも僕の中にある彼らの遺伝子を追い払うことはできない。もしそれを追い払いたければ、僕自身を僕の中から追放するしかない。/ そしてそこには予言がある。それは装置として僕の中に埋めこまれている。/ **それは装置として君に中に埋めこまれている。**(第1章：p.23)

「遺伝子」というのも、生命がこの世界で生きていくために、前の代から受け継いだ身体的な記憶だといえるだろう。その遺伝子に記録されたプログラムによって、生命はそれぞれの姿を形成し、生命活動を維持していく。そして、そこから逃れることは、その生命の死を意味するだろう。どんな生命も生きていく以上、自分に埋めこまれた遺伝子に依存して生きていくしかない。

だが、遺伝子は自分に由来するものではない。それは自分のものであるが、自分のものではないのである。こうして「埋めこまれた」「装置」としての、自分の内なる他者を壊すため、カフカ少年は森の中へ入っていく。森の中へ入る場面でカフカ少年は、次のように述べている。

> それから思いなおして、デイパックの中から狩猟用のナイフを取りだし、ポケットに入れる。父親の机の中から持ちだしてきた鋭利なナイフだ。もし必要があればそれで手首の血管を切り裂き、僕の中にあるすべての血を地面に流し去ることがで

きる。そうすることによって、僕は装置を破壊するのだ。/ 僕は森の中核へと足を踏み入れていく。(第41章：p.352)

「鋭利なナイフ」により「手首の血管を切り裂き、僕の中にあるすべての血を地面に流し去る」ということは、自分に埋めこまれた内なる他者である遺伝子を否定するために、自らの命を否定することにほかならない。しかし、カフカ少年は自らの命を絶つわけではない。代わりにカフカ少年がおこなったのは、森の奥へと進み、戻ってくることである。

森の中は自己のコントロールの及ばない、他者的な「無意志的記憶」の世界であった。カフカ少年はそれを拒むことで、自己的な「意志的記憶」の世界へ戻ってくるのである。そして、他者的な「無意志的記憶」の世界にとどまる岡持や佐伯さんには、死が与えられることになる。

つまり遺伝子という内なる他者を破壊できない代償として、記憶の中から他者性を抹殺することで、カフカ少年は完全な自己を取り戻そうとしたのである。そして「入り口の石」が閉じられることにより、他者と自己の亀裂は決定的になる。もはや他者は自己へと浸入することがみとめられない。こうして他者を殺した(と信じる)ことで、カフカ少年は完全な自己を取りもどしたと錯覚し、トラウマから立ち直るのである。

6. 生き残るもの / 殺されるもの

ここまで岡持と佐伯さんについて主に論じてきたが、もう一人物語の最後で死を与えられる人物がいる。それはカフカ少年の分身ともいえるナカタさんである。ナカタさんも、両親から虐待されトラウマを抱えていてもおかしくない人物であるが、物語の最後で救われることはない。

カフカ少年がトラウマを克服し、解離した自己を統一するのが物語の最終目的であれば、ナカタさんは物語の最後に生きていてはいけないことになる。そもそも、ナカタさんがいる限り、カフカ少年は完全に自分の記憶を支配すること

ができない。ナカタさんがカフカ少年の父を殺す間、カフカ少年は記憶を失っていたことからもわかるように、ナカタさんが存在する限り、カフカ少年は完全に記憶を管理することができないのである。

だが、ナカタさんに死が与えられる理由はそれだけであろうか。このことについて、前述した「意志的記憶 / 無意志的記憶」という点から、さらに考察をしてみよう。例えばナカタさんは、自分のことを次のように説明している。

> 「ナカタは頭が悪いばかりではありません。ナカタは空っぽなのです。それが今の今よくわかりました。ナカタは本が一冊もない図書館のようなものです。昔はそうではありませんでした。ナカタの中にも本がありました。ずっと思い出せずにいたのですが、今思い出しました。はい。ナカタはかつてはみんなと同じ普通の人間だったのです。しかしあるとき何かが起こって、その結果ナカタは空っぽの入れ物みたいになってしまったのです」(第32章：p.168)

「図書館」が自分で記憶を管理することができる「意志的記憶」の世界の象徴であることを考えれば、「本が一冊もない図書館のような」ナカタさんは、記憶を自己管理できない存在であることになる。ナカタさんは文字の読み書きができないが、これは記憶にとって致命的であるだろう。なぜなら、記憶を保持するためには、本のように記憶を文字として定着させなければならないからである。こうして記憶を十分に扱うことのできないナカタさんは、記憶を自己管理できなかった岡持や佐伯さんがそうであったように、物語の最後で殺されるのである。

カフカ少年がトラウマを克服するのに、なぜ他のトラウマを抱える人物の犠牲が必要なのか、もはや明らかであろう。カフカ少年は、他者を殺すことで自己を取り戻したと錯覚しているが、ここでいう他者とは記憶を管理できないもののことである。そうした他者を殺すことで、自分は記憶が管理できる存在だと考えることができるのである。

それはカフカ少年の主体の形成に必要な犠牲だといってよい。つまり、カフカ少年は、記憶を扱えないものを排除することで、そうではない自分(=記憶を扱うことのできる自分)を確立しているのである。

7. 強きもの/弱きもの

このような自己の確立は、強さとともに語られる。そもそも物語の冒頭では、次のようなことが目指されていた。

> 「君はこれから世界でいちばんタフな15歳の少年にならなくちゃいけないんだ。なにがあろうとさ。そうする以外に君がこの世界を生きのびていく道はないんだからね。そしてそのためには、ほんとうにタフであるというのがどういうことなのか、君は自分で理解しなくちゃならない。わかった？」(カラスと呼ばれる少年：p.11)

ここまでの議論から明らかなように、ここでいう「タフ」さとは、記憶を完全に支配できる力をもつことだと考えられる。反対に、記憶を支配できなかった岡持や佐伯さんやナカタさんは、「弱い」ものとして、物語の中では「生きのび」ることができないのであろう。

こうして殺される他者は、社会的に弱い立場のものに重ねられている。ナカタさんは戦争中の事件により障害を抱えることになってしまった。そのため彼は学校や家庭から存在を忘れられ、親戚の家に預けられ、自分で稼いだ貯蓄も従兄弟に奪われて、細々と生きることを余儀なくされている。このような社会的に弱い立場に立たされたナカタさんに、物語はカフカ少年の父母殺しを代行させ、挙句の果てには死を与えるのである。

これは岡持節子と佐伯さんにも当てはまるだろう。小森陽一は、戦中・戦後の歴史の責任を岡持や佐伯さんに負わせ、女性であること自体が「罪」であるかのように仕向ける「女性嫌悪(ミソジニー)」が、この小説の根底にあると指摘している。[9] この女性というのも、男性中心的な歴史や物語から周辺化されてきた弱い立場の存在であるといえるだろう。にもかかわらず、カフカ少年よりもはるかに重いトラウマを抱えていると考えられるこの二人の女性に対し、物語は残酷にも死を宣告するのである。

---

9) 小森陽一(2006)『村上春樹論 『海辺のカフカ』を精読する』、平凡社新書、pp.211～221

このように社会的な弱者に、物語の中でも弱いものの役割が担わされているのである。歴史的に社会から排除されてきた障害者や女性に罪や責任を被せることで、自らの罪は目立たないようにするという巧妙な罠がここにある。それは概して強い者によって語られる、歴史という物語の言説秩序を強化・再生産し、排除された弱者への視座を隠蔽するものであろう。

もちろんこのように述べると、さくらや大島さんについてはどうなるのかという反論があるだろう。確かに二人は女性である。さくらの家庭環境もうまくいっていないようであるし、大島さんについては「血友病」という難病を抱え、しかも自ら「特殊な人間」と語るように、性的にも社会から周辺化された存在であるといってよい。

しかし、さくらは血を浴びて動揺したカフカ少年を家に泊め、射精の手伝いをするなど彼の性的欲望を満たしてやったりする。大島さんもカフカ少年を図書館にかくまい、家出した少年の生活のほとんどすべての面倒をみる。つまりこれらの他者は、カフカ少年にとって自己の思い通りになる存在であり、極めて自己に近い存在なのである。

自己のために都合のいい他者は生かされ、そうでないものは記憶を管理できない「弱いもの」としての烙印を押され、責任すら担わされる。こうして弱いものを排除することで、カフカ少年は弱くない自分(=世界でいちばんタフな15歳の少年)となるのである。[10)]

8. 物語と責任

フロイト以降、抑圧された体験を「物語」るという手法は、トラウマから立ち直るための手段として、広く受け入れられるようになった。抑圧された体験を時

10) 補足すると、殺される弱者は何も人間だけではない。殺される猫でさえも、選別されている。例えば、縞猫のカワムラさんは自転車の事故で「はねとばされてコンクリートの角で思い切り頭を打」って「以来筋道を立てて口をきくことができ」ない障害を抱えた猫であるが、ジョニー・ウォーカーによって無残にも殺される。ちなみにナカタさんに有力な情報を与えたシャム猫のミミは、殺される前に救われることになる。

間的に位置づけ、因果関係をつけて物語化することは、心的外傷から立ち直るための一つの方法であろう。

したがって「物語」ることが、自己のコントロール下に記憶を置くこと、つまり「意志的記憶」の中に過去の体験を位置づけなおすことであっても、それは必ずしも悪いことではない。深い傷を負った人間が、それによって傷を癒すことができるのであれば、物語化はトラウマを抱える人にとって大変意味のあることだろう。

だが、安易な物語化は問題もはらんでいる。物語は自分の都合のいいように出来事を並べ、そこに因果関係をつけることもできるからである。ホロコーストを否定したり、狭いナショナリズムにとらわれた「国民の物語」を正当化したりする歴史修正主義などは、そのようなものの典型的な例であろう。しかし、自分勝手な物語化がゆるされるはずもない。そこで求められることは倫理であり、責任である。

カフカ少年は、アイヒマンの裁判に関する本を読んだとき、後ろの見開きに大島さんのメモがあることを発見する。そこでは責任は想像力とともに語られる。

> 「すべては想像力の問題なのだ。僕らの責任は想像力の中から始まる。イェーツが書いている。In dreams begin the responsibilities－まさにそのとおり。逆に言えば、想像力のないところに責任は生じないかもしれない。このアイヒマンの例に見られるように」/大島さんがこの椅子に座って、尖った鉛筆を手に、本の見返しにメモを書き残す光景を僕は想像する。夢の中から責任は始まる。その言葉は僕の胸に響く。(第15章：pp.277～278)

ここには「想像力」と「夢」の間に混乱が見られる。大島さんのメモが「責任は想像力の中から始まると」いうのに対し、カフカ少年は「夢の中から責任は始まる」と考える。しかし、「想像力」と「夢」を同等に扱ってよいのだろうか。

想像とは自己が主体的におこなうものであり、その意味では意志的な記憶の想起と似ている。たとえ他者のことを想像するとしても、それは自己によってイメージされた他者像である。もちろん相手を想像し、相手の立場に立って物を

考えることは、決して悪いことではないだろう。しかし、想像というものは、自分の立場から他者のことを勝手に想像することも可能であり、自分の都合のいいように他者を歪めてしまうことにもつながりかねない。

一方、夢の方は自らの意志で見られるものではなく、その意味では無意志的な記憶の想起に似ている。いくら自分で都合のいい物語や想像をしても、夢は向こうからやってくる。それは自分の想像を超えた他者の声として、自分に迫ってくるのである。

> 僕は本を閉じ、膝の上に置く。そして自分の責任について考える。考えないわけにはいかない。僕の白いシャツには新しい血がついていたのだ。僕はこの手でその血を洗い流した。洗面台が真っ赤になるくらいの血だった。その流された血に対して、僕はたぶん責任を負うことになるだろう。自分が裁判にかけられているところを想像する。人々が僕を非難し、責任を追及している。みんなが僕の顔をにらみ、指をつきつける。記憶にないことには責任を持てないんだ、と僕は主張する。そこでほんとうになにが起こったのか、それさえ僕は知らないんだ。でも彼らは言う、「誰がその夢の本来の持ち主であれ、その夢を君は共有したのだ。だからその夢の中でおこなわれたことに対して君は責任を負わなくてはならない。結局のところその夢は、君の魂の暗い通路を通って忍びこんできたものなのだから」(第15章：p.278)

「記憶にないことには責任をもてないんだ」とカフカ少年は主張する。それは自分で管理できない記憶や夢には、責任がないのだということである。しかし、「彼ら」は「結局のところその夢は、君の魂の通路を通って忍びこんで」くるものだとして、カフカ少年の責任を問う。夢は自分を超えた他者の声として自分の中に入ってくる。そうした他者の声に対して応答する責任が、カフカ少年に求められているのである。

カフカ少年がいかに他者を殺そうとも、いかに想像だけから責任を思考しようとも、他者から逃れることはできない。他者として向こうからやってくる夢に、カフカ少年は悩むことになる。例えば、夢の中で佐伯さんと交わったカフカ少年は、次のように考え込む。

> いったいどこから君の責任は始まるのだろう。(中略)しかし、夢と現実の境界線を見つけることはできない。事実と可能性の境界線さえみつからない。君にわかるのは、自分が今とても微妙な場所にいるということだけだ。微妙で、同時に危険な場所だ。君は予言の原理やロジックをつきとめるこができないまま、その進行に含まれてしまっている(第29章：pp.113～114)

「夢と現実の境界線を見つけることはできない」というのは、自己の中に他者が入り込み、自他の境目が揺らいでいる状態であろう。だが、それは「微妙で、同時に危険な場所」として片づけられる。「予言の原理やロジック」という自分に向かってくる他者の声は、それ以上「つきとめ」られることなく、責任の問題は放置されることになる。

しかし、こうした「微妙」な「場所」を引き受けて他者の声に耳を傾けること、そしてその声に自らが責任をもって応答することこそが、真に他者との関係を築くことではないだろうか。『海辺のカフカ』では、こうした他者への応答責任をうやむやにするどころか、他者的なものを殺して自己的なものへ戻ってくるのである。

しかも、そうした殺しの最も中心的な責任を担うはずのカフカ少年は、自分に責任がふりかからないように、もう一人の自分であるナカタさんに父も母も殺させ、そうした加害者としての自己(=ナカタさん)も最後に殺している。周到に責任を回避しているのである。

9. おわりに

本稿では、「トラウマ・記憶・物語」などをキーワードとして、『海辺のカフカ』の考察をおこなってきた。この物語はトラウマを回復する物語でありながら、カフカ少年以外のトラウマを抱える人物たちには死が与えられる。森から図書館への移動の意味や、血の問題などから明らかなように、それは記憶から他者的なものを殺して自己を取り戻そうとする試みであった。その際、殺される他者に

は、記憶を管理することができないという性質が授けられる。そうした他者を排除することで、それとは違う記憶を管理できる自分を、カフカ少年は確保しているのである。

そして、記憶を扱えずに殺されるものたちは、もともと社会的に弱い立場のものばかりであった。そうした社会的に周辺化されたものを、弱くて生き残れないものとして犠牲にすることで、自分は「タフ」な少年としての主体を回復する。これがトラウマの回復として、物語でおこなわれていることであり、他者を犠牲にしたことに対する責任や倫理については曖昧なまま放置されている。

最後に、こうした物語がベストセラーとして、熱狂的に受容される心理的な状態について、少し考えておきたい。小森陽一は、『海辺のカフカ』が「癒し」の物語として読まれていることについて、警鐘を鳴らしている。実際どのくらいの読者が、物語に癒しを感じているのかはわからないが、一般論としては小森のいうように「村上春樹のブランド・イメージ」が「<癒し>の方向で確定」されつつあることは間違いないと思われる。[11)]

そうした背景には、癒しを求める社会的な欲求がある。癒しとトラウマは別の問題ではない。例えば、斎藤環は「癒しブームとトラウマ・ブームは表裏一体」であると指摘する。斎藤によれば、「多くの人々が「トラウマ語り」に魅了され、それを語ることでそこから癒されたがっているという状況」があるという。[12)]

それにしても、なぜここまで心を問題としたがるのだろうか。そうした社会的な要求の背後には何があるのだろうか。もちろん、その要因はいくつか考えられるだろうが、ここではとりあえずポスト・モダン以降の実存的要求の問題を挙げておきたい。ポスト・モダンを経て、従来のような大きな物語が失墜する中で、価値観も思想も多様化し、依拠すべきものが失われてしまった。そうした中で、新たな拠りどころとして確固たる本質や自分の主体を求める願望が強まっていると考えられる。

『海辺のカフカ』のトラウマ回復が、他者の犠牲による自己規定と結びついて

11）小森陽一、前掲書、pp.9~11

12）斎藤環(2003)『心理学化する社会 なぜ、トラウマと癒しが求められるのか』、PHPエディターズ・グループ、pp.4~8

いたことを思い出しておこう。他者を排除してまで記憶を管理しようとする試み、しかもそれを「タフ」な自分とみなす試みは、確固たる自分の実存に対するあこがれといえないだろうか。

自己を求めたいという気持ちはわからないでもないが、しかしそれは、他者へと開かれたものでなければならないだろう。カフカ少年のように、すべてを自己管理できると考えることは、結局自分の殻に閉じこもってしまうだけである。

そうした狭い自己は、容易に管理の対象となってしまうだろう。実際、心の問題を装った管理が、現に進んでいることにも注意を払う必要がある。例えば、2002年に学校に突如配布された『心のノート』[13]などは、一見すると心の問題を扱っているようで、内容は道徳的な教育を目指したものであり、その中には愛国心の涵養なども含まれている。

狭い自己に閉じこもり他者を省みない主体は、ナショナリズムのような自己中心的な言説に容易に取り込まれていくだろう。そうした中で自己を絶対化し、しかもその根拠に記憶の管理をおくことは、集団的な記憶の問題として考えれば、歴史を自国の都合のいいように解釈し、場合によってはその歪曲も厭わないことを意味するはずである。そして、ちょうど小説の中で社会的に周辺化された人々が排除されていたように、近代国民国家の歴史の語りの中で排除されてきた障害者、女性、植民地などの問題は、省みられることもなく葬り去られてしまうだろう。

日本における1995年の阪神・淡路大震災や地下鉄サリン事件、あるいは世界的に見れば2001年の同時多発テロ事件など、確かに社会を揺るがすような衝撃的な事件がないわけではない。そうした事件は、当事者には想像を超える深い傷を残すであろうし、直接関係はなくてもショックを受けることもあるだろう。

したがって、心の問題など不要だというつもりはない。それがトラウマの回復に貢献するのであれば、それも大切にしていく必要があると思う。だが、安易にトラウマを求め、狭い自己に閉じこもってしまってよいのだろうか。これは何も心の問題を利用して、個人を管理しようとする側だけの問題ではない。癒しを

13) この『心のノート』の編集委員会の座長が河合隼雄である。

求めて管理されることに身を任せる側にも問題がある。

これは小説でいえば、トラウマ・ブームに乗って、簡単に癒しを感じてしまう読者ということになる。もし、『海辺のカフカ』のような文学に読者が癒しを感じているとするならば、それは記憶を他者から簒奪して自分の管理下に置き、弱きものにその責任を被せ、己の好きなように過去(歴史)を物語り、しかもそれを「強さ」と自認する身勝手な自己満足以外のなにものでもないだろう。

それは決して癒しではない。卑しいことである。

참고문헌

加藤典洋(2006)「『海辺のカフカ』と「換喩的な世界」」『村上春樹論集②』、若草書房
河合隼雄・村上春樹(1999)『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』、新潮文庫
小森陽一(2006)『村上春樹論　『海辺のカフカ』を精読する』、平凡社新書
斎藤環(2003)『心理学化する社会　なぜ、トラウマと癒しが求められるのか』、PHPエディターズ・グループ
_____(2004)『解離のポップ・スキル』、勁草書房
村上春樹(2005)『海辺のカフカ』(上・下巻)、新潮文庫
村上春樹・湯川豊・小山鉄郎(2003)「ロング・インタビュー 村上春樹『海辺のカフカ』を語る」、『文学界』57(4)

❖ 투고일 : 2007. 6. 30.
❖ 심사일 : 2007. 7. 30.
❖ 심사완료일 : 2007. 8. 13.